

# 英語圏の文化財の解説における技術的・文化的な変化が及ぼす影響について(日本語訳)

Rebekah Harmon<sup>†</sup>

† WritingWise

キーワード：翻訳、技術、博物館

## The Impact of Cultural and Technological Shifts on English Texts Related to Cultural Heritage (Japanese Translation)

Rebekah Harmon<sup>†</sup>

† WritingWise

Keywords: translation, technology, museums

### 序論

英語圏では文化財の解説の書き方について、最良の事例を取り上げた資料が博物館や学者によって数多く執筆、発行されている。実務上では役立つが、言語は文化と共に常に変化していくため、英語圏における作品・文化財の解説の理想的な在り方も、それに伴い変化し続けている。ただし、作品・文化財の解説の歴史的な変化と全体像を包括しながら俯瞰した論文はあまり見受けられない。本文の目的は、日英翻訳との関連において、文化財解説における技術的・文化的な変化がどのように展開されたかを主として論じることである。また、社会的言説の多様化および新技術がもたらした変化の一部を紹介することである。これらの変化を分かりやすく示すため、まずは歴史的背景として、草創期の博物館の解説の発展を説明する。

### 1 草創期の公共博物館とその解説

18世紀および19世紀に欧米の博物館・美術館の解説は、主に上流階級の人々のために書かれた(Shaffer, 2017)。見学者は、作品についてある程度知識を持つことが前提とされ、書かれる解説は意外な程に至って簡潔であった。例として、

リュクサンブル美術館が1774年に来客に提供した図録には、作者・作品の名称、寸法および画題のみが掲載されていた程である(McClellan, 1988)。

20世紀初頭に入ると、識字率が上昇して、社会教育への関心が高まった(Ingleby, 2020)。1903年にドイツで「Museums as Places of Popular Culture」(大衆文化の場の博物館・美術館)という会議が開かれ、当時の新聞に、目標は「博物館が労働者階級とつながる方法を討論すること」とされた(p. 610)。そこで、ドイツの研究員が教科書的な解説を載せることを勧めた。これは目立った動向の兆候のようで、20世紀半ばになると、欧米の博物館のほとんどは専門家が書いた教科書風の解説を採用していた。

## 2 社会的言説の多様化がもたらした変化

1970年代から教科書風の書き方の解説が批判の対象となった。大量の情報を提供するのが良いことだと認識されていた一方で、専門用語が多く理解しにくいため、解説を無視する来館者は少なくなかった(Fragomeni, 2010)。このような事情から、短くて分かりやすい解説の作成が求められ(Serrell, 1996)、1980年代には会話的な文調や口語体的な書き方も推奨された(McManus, 1989; Ravelli, 1996)。

この動きと同時に学界ではフェミニズム理論とポストコロニアル理論が進み、博物館が歴史について主観的な書き方、時として議論的な解釈を事実の様に提供してきたことが批評及び批判の対象となった(Vergo, 1989)。主観的な文章を書く場合、裏付けも書くことが求められるようになった。この考え方方が作品の価値判断の範囲にまで適用され、解説で「good」(佳品)や「masterpiece」(傑作)などという言葉が使用される場合、その具体的な理由を入れることが一般的となつた(Interdivisional Committee on Interpretation, 2010)。

フェミニズム理論から生じた例として、画題上の性別の区別に関わらず、性別の区別を誇示せず避け、中性的な印象を持たせた書き方やトーンが求められるようになった。画題が女性の場合、作品名称や解説に名前の代わりに男性との繋がりや関連性を強調する言葉(「～の妻」等)や、中性の名詞の代わりに男性の目線を仄めかす単語(「美人」等)は避けられている(Clover et al., 2018; Machin, 2008)。

また、ポストコロニアル理論やマイノリティと先住民に関わる国際的な枠組みの変化は、言語の説明を含めて欧米の博物館の方針に幅広い影響を与えた

(Coxall, 2000)。具体例として、1990年代から2010年代にかけて、欧洲では博物館名に「ethnography」（民族誌学）を使用せず、「world cultures」（世界の文化）や「cultures」（文化）を使用する実例が複数出た。理由として、民俗誌学の前提となっていた「我々」対「彼ら」という二元性を乗り越えるために機関名を変更した、と挙げられている (Pagani, 2017)。

他ケースでは、アメリカのミネアポリス美術館の解説方針では、次のことが定められている。

作品、理想、材質等を示す場合〔中略〕「pre-Columbian」〔先コロンブス期的〕や「Oriental」〔東洋的〕のような形容語句の代わりに、ヨーロッパ中心主義を反映しない言葉を必要とする

(*Interdivisional Committee on Interpretation*, 2010, p. 8)

さらに、オランダの熱帯博物館 (Tropenmuseum) が英単語の手引き書を発行した。その中で、「Western」（西洋）等、国によって意味が異なる地域の呼び方を避け、特定の国名またはグループを示すことを推奨している (Tropenmuseum, 2021, p. 143)。文献学的実験として、国語辞典での「西洋」と英英辞典での「West」の定義を比較してみると、興味深い考察が可能かもしれない。

ジェンダー・インクルージョン等の運動が及ぼす影響により、英語解説は今後も変わっていくと推定されるが、本文の文化的変化に関する話はここで終わる。次は、技術的な進歩がもたらした変化を取り上げ、それにより博物館・美術館が発表、展示する英文に確実な影響をどう及ぼして、現在も問われ、変化を続いているかという問題について述べる。

### 3 技術の進化がもたらした変化

1952年の世界初の博物館オーディオガイド (Shaffer, 2017) から現代のタッチパネルやディスプレイまで、技術の進化が博物館・美術館への来館者の経験を抜本的に変革した。新しい技術は、博物館・美術館に対して変化へ適応した解説の作成を求め、文化遺産に関する英単語や表現を変えてきた。

まずは歴史的な実例として、英語圏でカラー写真の普及が図録へ及ぼした影響を取り上げてみる。アメリカのメトロポリタン美術館の1911年の陶磁の図録をみれば、数少ない白黒写真に隣接して、粘土や釉薬の色を含めた作品の詳しい説

明が掲載されている(Pier, 1911)。また、同美術館の1974年の中国磁器の図録を確認すると、数枚の写真が入るが白黒写真で、依然として作品の名称や材質の説明に色の説明が入っている例が多い(「black-painted decoration」や「painted in iron red」)(Le Corbeiller, 1974)。これらに対して、2003年の織部焼の図録ではカラー写真が多く、作品の名称や材質の説明から色に関する記載がほとんど消えている(「glazed stoneware」等)(Murase, 2003)。これは織部焼の図録に限ったものではない。現在では、英語圏の博物館・美術館が使用する作品名称や材質説明の多くから彩色に関する言及が消えている。

もっと最新の現象として、いわゆる「バイラルコンテンツ」の力も英語を変えている。具体例として、2015年から、日本の金継ぎに関するミームがSNSで流行りになった。割れや欠けた箇所に修復を施した故に美しい、という美的・芸術的価値を伝えるメッセージが人気を博した。その影響で、工作やDIYの世界で「kintsugi」という言葉がよく知られるようになり、アメリカのTuttle社が2021年および2022年と立て続けに「kintsugi」をタイトルにした本を出版した(Uchimura et al., 2022)。さらに、最新の古着をアップサイクルする流行が追い風となって、Tuttle社は「sashiko」(刺し子)と「boro」(襤縫)をタイトルにした本も出版した。

本稿を執筆した2022年時点で、東アジアの文化財まで考察範囲を拡大すると、漆工品についてYouTubeで再生回数が最も多いのは、イギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館が投稿した韓国の漆工工程に関する動画である。特に近年においては英語圏で韓国の人気が急上昇し、英語版のWikipediaでは「najeonchilgi」(螺鈿漆器)のページまで存在している。

翻訳者にとって、今後、世界の文化財に関わる英単語がどう変化をしていくか、注視し検討する価値は十分にあると言える。

## 結論

---

英語圏で美術館・博物館用の文章作成作業は困難と認識され(Blunden, 2006)、文化財の解説を英訳することには、それ特有の問題も付随している。本文では、簡潔ながらも、文化財解説の執筆や多言語化に携わる方々へ、参考までに、英語圏で博物館・美術館の解説に影響を与えた主な変化を紹介しようと試みた。デジタルプラットフォームは、急激な速さで新しい言葉と文化的な概念を英語という言語領域に導入する力を備えている。上記に示したように、英語圏では世

界の文化財の捉え方と語り方が既に変化している。翻訳者や研究員にとって困難な面もあるが、より豊かな語彙を使用し広めていくことにより、世界文化をより開放的で自由に、そして客観的に語り合う時代が到来するという希望的観測もある。

### 謝辞

本稿の和訳にあたり、有益な助言を賜り、また丁寧に編集してくださった高橋いつか氏に深謝いたします。

### 参考文献

- Blunden, Jennifer. (2006). Dumbing down for museum audiences — necessity or myth? *The Fine Print* 3, 27–33.
- Clover, Darlene & Taber, Nancy & Sanford, Kathy. (2018). Dripping pink and blue. *Andragoška Spoznajna [Studies in adult education and learning]* 24. 11–28. <https://doi.org/10.4312/as.24.3.11-28>
- Coxall, H. (2000). "Whose story is it anyway?" Language and museums. *Journal of Museum Ethnography*, 12, 87–100. <http://www.jstor.org/stable/40793646>
- Fragomeni, D. (2010). The evolution of exhibit labels. *Faculty of Information Quarterly*, 2(1), 1–11. <https://hdl.handle.net/1807/80213>
- Ingleby, Matthew. (2020, June 10). Charles Dickens and the push for literacy in Victorian Britain. *The Conversation*. <https://theconversation.com/charles-dickens-and-the-push-for-literacy-in-victorian-britain-139245>
- Interdivisional Committee on Interpretation. (2010). "Interpretation at The Minneapolis Institute of Arts: Policy and practice." The Minneapolis Institute of Arts. [https://www.museum-ed.org/wp-content/uploads/2010/08/mia\\_interpretation\\_museum-ed.pdf](https://www.museum-ed.org/wp-content/uploads/2010/08/mia_interpretation_museum-ed.pdf)
- Le Corbeiller, Clare. (1974). *China trade porcelain: Patterns of exchange*. The Metropolitan Museum of Art.
- Machin, Rebecca. (2008). Gender representation in the natural history galleries at the Manchester Museum. *Museum and Society*, 6(1), 54–67. <https://journals.le.ac.uk/ojs1/index.php/mas/article/view/112>
- McClellan, A. L. (1988). The Musée du Louvre as revolutionary metaphor during the terror. *The Art Bulletin*, 70(2), 300–313.
- McManus, P.M. (1989). Oh, yes, they do: How museum visitors read labels and interact with exhibit texts. *Curator: The Museum Journal*, 32, 174–189. <https://doi.org/10.1111/j.2151-6952.1989.tb00718.x>
- Murase, Miyako. (Ed.). (2003). *Turning point: Oribe and the arts of sixteenth-century Japan*. The Metropolitan Museum of Art.
- Museums as places of popular culture. (1904). *Science*, 19(485), 610–612. <http://www.jstor.org/stable/1630861>
- Pagani, Camilla. (2017). Exposing the predator, recognizing the prey: New institutional strategies for a reflexive museology. *ICOFOM Study Series*, 45, 71–83. International Council of Museums. <https://doi.org/10.4000/iss.341>
- Pier, Garret Chatfield. (1911). *Catalogue of the collection of pottery, porcelain and faience*. The

Metropolitan Museum of Art.

Ravelli, L. J. (1996). Making language accessible: Successful text writing for museum visitors.

*Linguistics and Education*, 8(4), 367–387. [https://doi.org/10.1016/S0898-5898\(96\)90017-0](https://doi.org/10.1016/S0898-5898(96)90017-0)

Serrell, Beverly. (1996). *Exhibit labels: An interpretive approach*. Rowman Altamira.

Shaffer, William R. (2017). *Exhibition design and the evolution of museum-goer experience, 1924–2016*. [Master's thesis, Cooper Hewitt, Smithsonian Design Museum; and Parsons School of Design]. Smithsonian Research Online. <https://doi.org/10.5479/si.parsons/10088/35449>

Tropenmuseum. (2021). Words matter: An unfinished guide to word choice in the cultural sector.

[https://www.tropenmuseum.nl/sites/default/files/2021-04/words\\_matter.pdf.pdf](https://www.tropenmuseum.nl/sites/default/files/2021-04/words_matter.pdf.pdf)

Uchimura, W., & Watts, A. (2022). *The craft of translating books about handicrafts* [Webinar]. Society of Writers, Editors, and Translators. <https://youtu.be/GHhGRgkqVLs>

Vergo, Peter. (1989). *New museology*. Reaktion Books.

Victoria and Albert Museum. (2017, July 24). *How was it made? Korean inlaid lacquer* [Video].

<https://www.youtube.com/watch?v=dT8yXhCtfRM>